

## 聞くは一生の恥、聞かぬは一時の恥

中串 孝志

僕はドビュッシーが好きだ。

ピアノ曲の«Rêverie»(日本語ではよく「夢」「夢想」と訳される)をかれこれもう10年以上練習し続けている。つい2年ほど前だろうか、ようやく最初から最後まで通して弾けるようになった。

同じ時期から、「Clair de Lune」(「月の光」)の、リヒターによって易しくアレンジされたもの<sup>1)</sup>を弾き始めた。「Rêverie」を飽きもせず長らく弾き続けてきたことが練習として効いているのだろう、今度は取り組み始めてから1年ほどで、とりあえず最初から最後まで譜読みはできた。つい先日からは、「Valse Romantique」(「ロマンティックなワルツ」)に取り組み始めたところだ。

\*

本年報の第1号で、僕は、「知」そのもの、あるいは「知」という営みそのものに価値を見出せる能力あるいはこころのあり方のことを「教養」と呼ぼう、と提示した<sup>2)</sup>。そこでは、「知」を「専門・基礎」「常識・スキル」「教養」と分けた上で、「教養の森」センターのコンセプト等について議論した。当然この3つは互いに重なる領域がある(図1)。

教養というもの、それを大学という場でどのように考えるべきか、についての僕の認識について言うと、大きなフレームとしては、先の小文で述べた時のまま現在もさほど変わっていない。そこで本稿では、「教養」そのものというより、「教養」と「教育」との関わりを考えたいと思う。

\*

2017年9月中旬、Twitterでは学術クラスターを中心に、あるインターネット上の記事が話題になっていた。『ドイツ科学の卓越性の秘密：Nature 最新号の記事を読んで』と題されたその記事<sup>3)</sup>は、ドイツ・メルケル首相の政策と我が国のそれとの違いを悲嘆する記事だったが、特に話題になっていたのは、その記事中で引用されていた2014年OECD閣僚理事会での安倍首相の基調演説<sup>4)</sup>の一節だった：

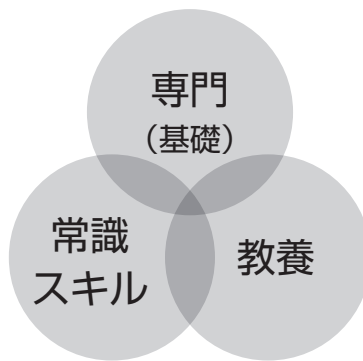


図1. 小論における「専門・基礎」「常識・スキル」「教養」

日本では、みんな横並び、単線型の教育ばかりを行ってきました。小学校6年、中学校3年、高校3年の後、理系学生の半分以上が、工学部の研究室に入る。こればかりを繰り返してきたのです。

しかし、そうしたモノカルチャー型の高等教育では、斬新な発想は生まれません。

だからこそ、私は、教育改革を進めています。学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたいと考えています。

(※太字強調は引用者<sup>①</sup>による)

後半だけを見れば、いかにもどこかの地方国立大学のトップ・経営陣あたりが好きそうなフレーズではあるが、それはともかく、記事は「まともな科学者なら、これを読んだらこの国の科学はおしまいだと思うだろう」と続けている。本稿で政権・政策批判を行うのは適切でないと思われるのでそれは避けるが、そもそも政策の是非と関係なく、単純にその文章の意味するところは何かといえば、明らかにそれは「学問との訣別」の意思表示であると言ってよいだろう。しかもこれは世界に向けた表明なのである！ 僕はなんと無教養な表明であろうと感じた。

学問とは、人類が営々と積み上げてきた「知」の山脈のようなものと言えるだろう。であれば、この演説の一節の意味するところは、「知」の価値の否定、知性との訣別と言えよう。「教育は国家百年の大計」と言われる。日本の100年先を見通した教育が知性との訣別であるとは、僕には信じがたい。

記事中でも指摘されているが、これは首相が勝手に言っているのではなく、(首相の意向に沿っているとは言え)日本の現実の状況を俯瞰し咀嚼した上で導かれるビジョンを、首相本人ではない別のブレーンが原稿にまとめたものだろう。そういう意味で、この滲み出る無教養さは、首相個人の問題ではなく、首相

周辺を形成する官僚をも広く含めたこの国を動かす「トップ層」が日本の現状をそのように捉えていることの表れであり、従って本質的には、そのような思想・認識を持てる人々がトップを形成するに至らしめる「ボトム」、即ち日本社会、国民全体の無教養さが結晶化されたものだと考えるべきだろう。かつて知性は、あるいは学問は、「末は博士か大臣か」などと敬意の対象であった。今や、職業に関わらない学問など、唾棄すべき存在に成り果てたのである。以前本年報に寄稿した前掲の小文<sup>10</sup>でも指摘したが、このような、知的なものに対する価値の転倒が起こっているのである。

\*

この価値の転倒についてももう少し詳しく観察してみると、どうやら、今すぐ「役に立つ」ことを知っている・身に付けていることは重要だが、そうでないものごとを知っている・わかっている・身に付けていることは、無駄であり、無駄なことは即ち悪と見做されているようなのである。意識の高い、コストカットの考え方である。

古くから「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」と言われてきた。しかし現在は、聞くこと、即ち知ろうとすることの方が一生の恥であり、それくらいなら聞かない（知らない）方がまし、と考えている人が多いように見受けられる。むしろ、恥ずかしい思いをするかもしれないがほんの一時のことなので聞かない（知らない）。どうせいま「役に立つ」わけでもない、余分なことを知っていたって無駄なのだし、今や、無駄なことをあえて知ろうとすることこそが恥なのだから。

つまり現代では「聞くは一生の恥、聞かぬは一時の恥」なのである。

\*

アイザック・アシモフ『ファウンデーション』では、知的コンテンツを扱える選り抜かれた集団が、辺境の惑星ターミナスに移住し、そこで、滅びゆく銀河帝国から人類の知を守りつつ次の世界の中心を担う存在として生き抜いていく未来史が描かれる<sup>11</sup>。西洋の地図上の世界では辺境の地である日本はターミナスのようなあり方を指すのが生き残る道であると思い込んでいた僕には、この国家レベルでの「知」の価値の転倒は自殺行為に見えてしまうのである。

『ファウンデーション』では、銀河帝国滅亡後、数万年続くと予想される混沌の時代を数百年に縮め次の世界秩序を生み出すため、ターミナスを拠点とする

「ファウンデーション」がその知性を武器に周辺国家との対決をくぐり抜けていく…というより、ファウンデーション以外の国家、そして銀河帝国が、人類の英知を失っていくことにより、崩壊していく。

日本は既にかつての地位を追われ、没落の道を突き進んでいるように見える。アシモフの描いた銀河帝国さながらの知性の価値の喪失と没落の中で、大学こそがファウンデーションの役割を果たすべきではなかろうか。日本が、そして日本人が失おうとしている人類の英知、知性の復権が必要不可欠ではなかろうか。それこそが大学における「教養教育」ではなかろうか？

\*

知らないことが良いことであるという価値観。もちろん「ものしり博士」「雑学王」はそれだけでは教養人とは呼ばないが、それでも、かつては「知っている」こと自体に価値があった。「知識」の意味で「知っている」ことは、かつて、それ相応に評価されてきた。しかしいまは違う。知識を持つこと自体は評価の対象にはならないのである。それが形を変えたものが、センター試験にまつわるストーリーかもしれない。

◆32

曰く、センター試験は選択肢式で知識を問うものであり、知っていれば、もっと言えば「知ってさえいれば」、正解とされる選択肢にたどり着けるから、「わかっていなくても」点数が取れてしまう…というストーリーである。このストーリーの根拠がどこにあるのかわからないが、少なくとも事実としては、一般的に受け入れられていると言えるだろう。その共通認識があるからこそ、記述式の新テストへ移行することになったのだ。知識を持つことは評価の対象でない、という認識が一般に定着していることの表れである。

ちなみに、このようなセンター試験への認識に対し、人工頭脳プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」で知られる新井紀子氏は、Twitterで、

東ロボを5年間やった素直な感想として、センター入試は非常によく練られているなあ、と。「選択式=ダメ」「センター=知識を測っている」は単純すぎる図式だと思います。

とツイートしている<sup>9)</sup>。僕も今では様々な形の入試を作ったり採点したりする立場になることがあるので、センター試験は知識があるだけでは解けないよう練られているし、センター試験に限らず入試に関わる試験問題がよく練られているのはよくわかる。背後にある広大無辺な知の世界をどう切り取ってどのように問い

の形に凝縮するか…それは受験者たちに問うているだけではなく、世に問うているのだ…という、作題者の思い入れがそこにあることは、例えば石原千秋『教養としての大学入試国語』あたりを読めばよくわかるだろう<sup>7)</sup>。ではなぜそうまでしてそのような思い入れを込めたいのか。作題者の趣味、と言ってしまえばそれまでなのかもしれないが、作題者が、その問題の背後に広がる知的な世界そのものの価値のみならず、その価値を理解できることに価値を認めているからだろう。もっと直接的に言えば、それを理解できる仲間を見つけたい、出会いたいのである。

\*

「言うは易く行うは難し」である。実際に、「教育」を通じて、知的なものに価値を見出す感性を身に付けさせるのが教養教育であるならば、それはどのようなものになるだろうか。具体的にはどんな授業方法が考えられるだろうか。

科学普及ではなく科学コミュニケーションの実践活動で注目され、実際によく行われる取り組みとして「サイエンスカフェ」と呼ばれるものがあるが、その源流について、岸田一隆『科学コミュニケーション』は次のように述べている<sup>8)</sup>：

17世紀の英国では、東インド会社によってコーヒー・茶・陶磁器などが輸入されるようになり、コーヒーハウスが誕生しました。コーヒーハウスは商人や金融家や貴族の情報収集と社交の場であり、ジャーナリズム、文壇、さらには科学学会である王立協会などの誕生のきっかけともなりました。フランスでは思想家・文化人・芸術家たちがカフェに集まり、議論を行っていました。コーヒーハウスやカフェは、その誕生から、文化交流の場だったのです。

時は下って、1992年、哲学をソクラテスが実践した開かれたものにしようとして、フランスの哲学者、マルク・ソーテが哲学カフェを始めました。ソーテは51歳という若さで1998年に亡くなります。しかし、彼の遺志は受け継がれていきます。彼にならうような形で、1998年、英国のリーズ、および、フランスのパリとリヨンでサイエンスカフェが誕生したのです。そして現在、日本でも各地で盛んにサイエンスカフェが開催されるようになりました。

知的なコンテンツを交換し合うこと、知的空間の共有こそが享楽だったのだ。そして、そのような知的コンテンツをやり取りすることができる、そのことを楽しむことができる人を、「教養人」と呼ぶのだろう。

従って、大学の教養教育の一つの姿として、この「知的空間を共有する楽し

み」を見せ、学生に理解させるあり方が考えられる。この知的空間を現出させる方法として、複数教員による丁々発止の議論に参加させる、あるいは議論という営み自体を見る（見せる）ことは、非常に有意義であろう。そこで発生する知的な楽しみ、知的高揚感を学生と共有するためには、そのような「知的遊戯」を楽しむ教員が必要であり、かつ、その教員自身が楽しんでいる姿こそが教育コンテンツの核心である、と言えよう。その「ひと」そのものが文字通り「生きた教材」なのである。

クリス・アンダーソン『フリー』によると、著者が自身の執筆する記事をタダでインターネット上にアップする理由は、自身の講演料はしっかり取るからだ、と述べている<sup>9)</sup>。また、平林純『理系のためのプレゼンのアイデア』の結びでは、次のように述べられている<sup>10)</sup>：

プレゼンテーション “*presentation*” という単語は、“*present*” に接尾辞 “*ation*” が付け加えられた抽象名詞です。“*present*” はラテン語の “*pre*” (前に) + “*sun*” (存在する “*to be*” という “*esse*” の過去分詞) からきている言葉です。つまり、「目の前に存在する」ということがプレゼントです。(中略) 聴衆の目の前で「発表者が話をちゃんと見せる」こと、それはプレゼント (プレゼンテーション) そのものです。どんな場面であっても、相手が「確かに目の前にあると実感できる」ことが、本来の、そして理想のプレゼンテーションというものだと思います。

◆34

これらの例は、ひとが聴衆の前で話すとき、そのひと自身がコンテンツであることを物語っている。本人というコンテンツがその場に存在することが価値なのである。もちろん、教養教育の現場でも同じことである。所属学部など全く関係ない。

「ムツゴロウさん」と呼ばれた畑正憲氏を中心に据えた動物観察TV番組がかつて人気であった。その中で、動物たちの生の行動の録画を見ながら氏の解説の語りが入るシーンがよくあった。それと同じように、学生が、普段の生活では見かけることのない珍獣(?)である大学教員が丁々発止に *ad lib.* で語りをぶつけ合う様を眺めるのは、学びのコンテンツであるだけでなく、同時にエンターテイメントにもなり得るとも言えまいか。年末になると格闘技番組が盛り上がるが、いわば、知の格闘技のライブである。

ここに「複数の教員が参加するなんて無駄が多い」「どこに向かうかわからない議論では効率が悪い」とコストパフォーマンスを重視するとすれば、それこそ教養的ではないだろう。無駄を憎みコストカットし続けた結果が現在の大学の、

日本の劣化なのだから。

「教養の森」ゼミナールは、17世紀以降の、文化交流の場としてのカフェを和歌山大学に再現する試みだと考えて、僕は参加している。「21世紀サイエンス論」も、複数教員による、予定調和ではない丁々発止の議論を見せること、教員同士がそれを楽しんでいる姿を見せることを心がけている。また学外では前述のサイエンスカフェイベントもよく開催するが、それも、自分からの解説はできるだけ少なくし、会場のお客様の発言に応じて場を進めるよう心がけている。いずれも、事前の準備が不可能であり、人間としての底力を問われるため、僕にとっては非常にチャレンジングな場である。

\*

「教養の森」センターでは教養科目が「基礎」や「入門」の科目となることを避けることにしている。これらは体系的学問を「専門」としていくための教育のためのものだからだ。しかし、ここまで述べてきた前提があるのであれば、体系的学問の入門的ないし基礎的な内容であっても別に構わないことになる。ただし、その学問的内容を修得することを主たる目的にするのではなく、その学問を楽しんでいる「ひと」としての自分を見てもらうことをこそ主たる目的にしなければならぬし、そのような目的が伝わる科目名であることが奨励されよう。

35♦

その意味では、もしそのような体系的な学問（の入門）を語る授業をした結果、学生にその享楽を感じてもらえなかったならば、それは、その学問全体がつまらないものだと烙印を押されることを意味する。だから、教養教育の題材として、ある体系的学問を語るのであれば、その教員のプライド、そしてその学問のプライドを賭けなければならない、ということなのだろう。平田オリザ氏が本学「教養の森」センター設立5周年記念シンポジウム「わかりあえないことから」のパネルディスカッションで「教養科目は教員のプライドを賭けたものだ」と述べていたが、まさにその通りなのである。

\*

大学でできる教育が扱える範囲での「教養」は、そんなところだろうか。なぜなら、大学という場で、コンテンツを提供できるスタッフは（少なくとも現在）基本的には学者、アカデミックな意味での専門家であり、それは、企業に勤める人々が商品を扱うのを仕事とするのと同じ意味で、知性を扱うのが仕事の人々なのだから。

しかし、誰かを「教養がある人だ」と表現するとき、そこにはアカデミックな何かの豊かさや、知性を持つ人物であることも含まれているのだろうが、それだけではないように思われる。このことは、学問的な、体系だった「知」の集積、あるいはそれを楽しむ知性とは異なる「教養」が存在することを示している。そのような「教養」には、どんなものがあり得るだろうか。そして、どのように教育に活かせるだろうか。

誰かから、何らかのリクエストがあった時に、それが例えば知性を使うことであれば、アカデミックな、ないし、知的なあり方でボールを返せばいい。そこに楽しさを現出できる人物が教養教育の生きた教材だと述べた。しかし知性そのものが返球として求められていないリクエストも多くある。ここからは我田引水、自画自賛でしかないので申し訳ないのだが、例えば、僕の中学時代からの親友の一人の結婚披露宴ではリクエストに応じてサックスで“Fly me to the moon”を吹いた。PD時代の研究室に当時在籍していた博士課程の院生の結婚披露宴ではマジックのリクエストに応え、「寿」と大書されたシルクを出現させた。「何を投げられても何か返せる」だけの余技を身に付けるなど、「それは自分には関係ない」と切り捨てるあり方、無駄を憎みコストカットに明け暮れるアタマの使い方からは絶対に生まれない素養である。そのような素養に価値を見出している人がまだ生き残っているからこそ、「習い事」なる風習があるのだろう。このような素養を広義に「教養」であると捉えたとすると、手品であれ、音楽であれ、例えば就職活動のような類いには直接関係ないそれらを嗜むという営みやそこに価値を見出すところのあり方は、この広い意味での「教養」という言葉に該当するだろう。学生たちの「それは自分には関係ない」かどうかの判定基準は、多くの場合、いまの自分にとって「役に立つ」かどうかであろう。だから、「教養」とは「役に立つ」という思考からの卒業、なのである。「役に立つ」思考から逃れることができた人の持つ余裕、言い換えれば「無駄」こそが、享楽を生み出す。

\*

「神は細部に宿る」と言われる。僕が運営するゼミでは、毎週定例会があり、そこでは学年を問わず院生も教員も同様に自身の勉強・研究等についてプレゼンテーションを行う。毎回必ず自分が目指す卒業論文・研究に資するものに限定し過ぎるのも無料なので、「まれに」であれば、自分の勉強・研究とは関係ない「自分の好きなこと」についてプレゼンテーションすることを認めている。先の春に卒業した学生の一人は、ある時、自身の趣味である玉置浩二研究の成果についてのプレゼンテーションを行ったのである。Wi-Fiを駆使しYouTube動画も



交えたその発表は素晴らしいクオリティだった。

往々にして勉強不足のコンテンツについてのプレゼンテーションは、本人が面白いと思えないのはもちろん、その帰結として当然、観客から見ても面白いものではなくなるものである。彼のプレゼンテーションの素晴らしさは、普段から趣味として興味の赴くままに行っている営みが、即ち「オフ」での研究活動が、教養としての光を放ち、そこに楽しみを生んだのである。彼の本務である学業の観点からも、社会人基礎力として「役に立つ」かどうかの観点からも、玉置浩二研究は「無駄」でしかないが、そのコンテンツは細部まで吟味されているが故に「神」がそこに宿り、だからこそ享楽が共有できたのだ。

そういえば、「人は、話が上手な人の周りに集まるのではなく、楽しそうな人の周りに集まるのだ」と聞いたことがある。僕は、大学とは「おもしろい」ことをするところなのだと言いつけている。決して「役に立つ」ことだけを目指すところではない。そもそもそんな生きる余裕のない人間が「役に立つ」とは、僕には思えない。

\*

この週末も、時間をひねり出して、ドビュッシーの練習を10分だけでもしようと思う。あ、でもウクレレの練習もしなくては…。

37♦

## References

- [1] 全音楽譜出版社出版部, ドビュッシーピアノ小品集 全音ピアノライブラリー, 2008
- [2] 中申孝志, 教養は絶望の向こうに—科学コミュニケーションの現場から—, 和歌山大学「教養の森」センター年報, 1, 40-44, 2015
- [3] 西川伸一, ドイツ科学の卓越性の秘密: Nature 最新号の記事を読んで, <https://news.yahoo.co.jp/byline/nishikawashinichi/20170910-00075571/> (2017.11.11確認)
- [4] 首相官邸, 平成26年5月6日 OECD閣僚理事会 安倍内閣総理大臣基調演説, [http://www.kantei.go.jp/jp/96\\_abe/statement/2014/0506kichokoen.html](http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement/2014/0506kichokoen.html) (2017.11.11確認)
- [5] アイザック・アシモフ, 岡部宏之 (訳), 『ファウンデーション』, 早川書房, pp.242, 1984
- [6] <https://twitter.com/noricoco/status/910288258369597440>
- [7] 石原千秋, 『教養としての大学入試国語』, 筑摩書房, pp.302, 2000
- [8] 岸田一隆, 『科学コミュニケーション—理科の<考え方>をひらく』, 平凡社, pp.264, 2011
- [9] クリス・アンダーソン, 小林弘人 (監修), 高橋則明 (翻訳), 『フリー』, NHK出版, pp.352, 2009
- [10] 平林純, 『理系のためのプレゼンのアイデア』, 技術評論社, pp.176, 2006